

猪の歳時記

篠田 知和基

動物のフォークロアの中で、人間の伴侶たる犬や馬、あるいは猫、あるいは神格化されてゆく蛇や猿、死を司る猛獣としての虎・狼などが豊富なイメージを提供するのにくらべると、猪はむしろ地味な存在である。⁽¹⁾文学においても、「白蛇伝」、「熊男」などはあっても猪のロマンはあまり見あたらない。まして、その家畜化した豚においておやだ。(オーウェルの『動物農場』は寓意である)。

ところが、ゲルマン世界では猪があるときには神として崇められている。⁽²⁾狩猟獣としては、鹿よりも猪のほうがはるかに重要であり、生命の危険もはるかに大きかった。しかし、鹿は森の王者としてとどまったのに対し、猪は豚として家畜化され、文化的な狩としては珍重されなくなる。また棲息数も減ってゆく。(イギリスでは絶滅)。

日本では、猪はやはり鹿とならんで重要な狩猟獣である。のみならず「今昔」などでは「くさいなぎ」と称して、狐同様に、あるいはそれ以上に人を化かすものと考えられていた。⁽³⁾「古事記」などでも、猪はかなり出現回数の高い動物である。現在、狩猟伝承の調査

をすれば、出てくるものはほとんど猪である。⁽⁴⁾

豚がヨーロッパの農村の祭礼や年中行事に重要な役を演ずることはイヴォンヌ・ヴェルディエの『女のフィジオリジー』にくわしい。⁽⁵⁾都会の食生活が豚から牛に移行しても、農村では、豚のウェートがまだに高い。豚と牛は農村と都会のちがいだと言ってもいい。

さらにそれを猪とすれば、猪文化は豚文化に先行する古態であり、狩猟文化である。そこでも鹿に対して、高貴な獲物と庶民的な獲物という相違がある。

日本でも村と山のちがいで、猪は山(あるいは山村)の動物である。そしてまた、草原の妖異としても狐にその地位を逐われる古態の夢である。

それだけに文化的な説話などにはほとんど顔を出さない存在で、文学から猪のイメージをあとづけることは相当に困難である。ただ幸いに日本には早川孝太郎の『猪・鹿・狸』があり、フランスには「猪武者」ジョフロア・ド・リュジニャンをめぐる『メリュジーヌ』がある。⁽⁶⁾そこら辺りを手がかりに、猪のフォークロアをつきとめて

いこう。

ところで、『メリュジーヌ』も本来は蛇妖精の話だが、伊吹山の猪も書紀では大蛇とある。南方熊楠の『十二支考』や須藤功の『山の標的』によれば猪は蛇を食う。蛇が蛙を呑むことよって、昔話などで蛇と蛙が交替することに等しく、猪と蛇が接続する。愛知の「豊島が池」という話で、獵師が山へ行つてうとうとしてしていると目の前を大猪が走つてゆく。とっさに鉄砲をとって射つと、猪ならぬ大蛇が倒れている。獵師はその蛇の祟りで死に、その後生まれた獵師の娘が、十八の年に蛇になって豊島が池に入る。池の主は蛇体が本体であろうが、猪にも姿を変えるものと思われる。

土佐の伝承で、「朝倉の蛇田」というものがある(『大語園』による)。土佐の朝倉の網代谷に猪が出て畑を荒らす。郷士が銃を掲げて猪退治に出る。猪の群れに向かって引金を引くと、とたんに猪たちは忽然と姿を消す。そして郷士はにわかには眠気に襲われる。夢に亡父が現われて急を告げるのではね起きると大蛇が近づいてくる。突嗟に銃をかまえて退治する。のちに祟りを恐れて祠を建てて。蛇ののたうった稲田を蛇田と呼ぶと言う。これも蛇と猪の交替の例である。

ヤマトタケルが伊吹山で出会った山の神は「大きき牛の如く」という白猪である(『古事記』)。ヤマトタケルがそれを見て「山の神の使者」であろうと思つたのは、伊吹山の神が『日本書記』にあるように本来は蛇だからである。

もつともその『書記』でも、神が蛇と化して道をふさいだのを皇子が「是大蛇必荒神之使也」と言つてまたいでゆく。そのために雲霧大いに起つて、道に迷い、喪神する。したがって皇子には蛇でも猪でも本当の神の姿には見えなかつたわけだが、伊吹山の神が蛇で一説にヤマトノオロチの変じたものとされる一方、ときにそれが猪とも現することはまちがいない。

なお似た伝承で、早川孝太郎の報告では、獵師が鹿を射ちに行くと蛇が出て、それを射つと、家で留守番をしていた女房が倒れたという話がある。女が蛇になつていた人狼変身譚の日本版とも思われるが、鹿を射ちに行つたところ蛇が出てきたので、蛇と鹿が接続する。もつとも女房は、死に際に、さきほど夢を見ていて、夢の中で大蛇になつて鹿を追つていたところ獵師に射たれた。と語る。このばあいの鹿は「かのしし」で「いのしし」と通ずるものであろう。女は蛇でもあり、鹿でもあつた。

ヨーロッパの中世説話では、狩人を森で迷わせて、妖精の泉に導くのは、白鹿か白猪である。グラエランは鹿、ギンガモールは猪であり、『メリュジーヌ』では白くはないが、猪だった。レモンダンが主君ポワチエ伯と猪狩りをしてしていると、大猪が主君めかけて突進してくる。突嗟に槍を投げると、猪にあたつてはねかえつて主君の身体にぐざりと刺さつてしまふ。(あるいは猪をさしつらぬいて、余つた勢いで主君も串ざしにする)。レモンダンが途方に暮れて森をさまよっているとメリュジーヌに出会う。そしてふたりのあいだに生ま

れた子供の一人がジョフロアで、猪の牙を生やしている。

「六番目の息子の猪の牙は、『神の歯』という奇妙な名づけ方をされているが、まさに、コロンビエの森の猪のふしぎな存在の換喩的コピーである」(S・ロブラン「蛇と猪」『中世の変身と幻想動物誌』一九八五)。

『メリュジーヌ物語』で驚異の扉を開けるのがこの森の猪である。『ジョフロアはその猪の化身である』(同前)。

ロブランはただ、それだけにとどまらない。彼女は、「猪が蛇を断罪する(殺す)」と言う。たしかに南方などでも、猪は蛇の天敵だと言う。ただしロブランの論理はあまり説得的ではない。蛇女メリュジーヌが生んだ十人の子供のうち修道士となったフロモンだけが「彼女の肯定的面、キリスト教徒的面」であり、そのフロモンを修道院もろとも焼き殺したジョフロアは「メリュジーヌを人間世界と神の世界とに結びつけていた唯一のきずな」を断ち切ったと言う。⁽¹¹⁾

「彼はよきキリスト者としての女を殺し、蛇女をあらわにした」⁽¹¹⁾。たしかにジョフロアの悪行を聞いた父親レモンダンが怒りのあまり、妻のメリュジーヌに向かって、「すべては蛇女としてのおまえのせいだ」と口走る。⁽¹²⁾それがメリュジーヌの最後の変身と別離のきっかけになるのだが、そこに「猪が蛇を殺す」という構図を見るのはいくぶんうがちすぎだろう。

それより物語の中で、ジョフロアが二人の巨人と対決し、相手を打ち倒すところに注目したらどうだろうか。「巨人」は物語では

「野性人」として、棍棒をふりまわす体軀堂々たる偉丈夫の蕃人と描かれるが、本来はガルガンチュアなどの巨人は「大地」をあらわす地下の存在で、その姿勢は蛇であらわされることが多いのだ。ゲルマン世界各地に見られる「竜蛇騎馬神像」は地中から上半身をおこした蛇を騎馬の神が打ち倒す構図だが、⁽¹³⁾天と地と地下がひとつにあらわされた宇宙論的混成神像で、地下の神格は蛇なのだ。

ジョフロアが対決した巨人もとくに二人目はノーザンバーランドの山の中で彼らの祖父エリナス王の墓を守っている地中の巨人である。古来、地下の墓や宝物の番人は蛇か竜ということになっている。⁽¹⁴⁾これは、ネズミなどの害に対して穀物を守る役目を与えられた蛇のイメージの発展と考えられる。また地中の穴にもぐってゆき、あたかも地下の鉱物資源の秘密に通じているかに思われる蛇の姿勢からの連想でもある。ちなみにジョフロアは三番目のいさおしとして、アラゴンのカニグー山に収められた祖父エリナスの財宝も、番人の巨人を打ち破ってとりもどし、(同時に伯母のパレスチーナを解放し)、それをもって聖地奪回の聖戦に赴くことになっていたのが、病いのため果たせなかった。

つまり猪のジョフロアは、地下の墓や宝物をさぐりだして、その番人の巨人に蛇を打ち倒す使命を帯びているのだ。

そのさい、それぞれの墓や宝物は、メリュジーヌの母のプレシーヌや妹のパレスチーナによっても守られているのだが、勇士が巨人に蛇を打ち倒して妖精を解放すると、彼女たちも呪いをとかれて、

自由に妖精界へもどれることになる。それはメリュジーヌでも同じで、彼女も夫レモンダンに仕える身から、ジョフロアの行動によって解放されたのだとも考えられる。

ただし、「メリュジーヌ」の原話と目される、中世ラテン語説話集のいくつかのテクスト(「皇帝のたのしみ」「スーパー・アポカリプス」他)には蛇と猪の相剋は出てこない。蛇からして、必ずしも必須ではない。

アルフリンクネールは『中世の妖精』(二九八四)の中で、出典としてワルター・マップの『宮廷人の物語』(五話)、ジョフロア・ドセールの「スーパー・アポカリプス」(三話)以下十一の書目をあげているが、エリナン・ド・フロアモンはジョフロアの三話をそのまま再録、それをヴァンサン・ド・ボーヴェが『自然の鏡』で再録というぐあいに、まったく同じ話の再録があり、それを省くと、あとはジェルヴェ・ド・チルビュリーの「皇帝のたのしみ」(二話)ジロー・ド・バリ(ジラルダス・カンブレンシス)⁽¹⁶⁾に一話、計十一話で、うちジョフロアの「白鳥の騎士」の話と、ワルター・マップの「死女の子」の話を別とすると全部で九話である。

これがジャン・ダラスの物語の典拠かと言うと、そのうちのジェルヴェは読んでいた形跡があるが、他のすべてに目を通していたとは思われないし、だいたいが同じような話である。

これを十九世紀にブリュケがノルマンディで採集した「アルグージュの妖精」⁽¹⁷⁾、あるいはモニエとヴァントリニエがジュラで聞いた

「鷲鳥妖精」⁽¹⁸⁾の話などの民間説話と比較すると、おそらく当時流布していた民間説話を記録したもので、ワルター・マップやジェルヴェ・ド・チルビュリーと同じように、ジャン・ダラスも、民衆の語りを採録することは可能だったと思われる。

したがって、ジャン・ダラスの直接的出典ではないかもしれないが、同じような話が当時流布していたものとして参考にはなるだろう。その中で妖精が蛇(竜)になるのはエンノ(マップ)、ジョフロアのリンゴンの地の妖精、そしてジェルヴェの「ルーセの城の奥方」の三例だけである。

ほかに動物性が多少とも存在するものは、ワスチヌスの水の精で、「馬の銜」で叩いてはいけないという禁止を課し、それに背いたときには消え去るというのだから、水中の馬が人間の姿で来ていたのが、馬具に触れることによってまた馬に戻ったのだとも解される。しかしそれ以外の例はすべて人態の妖精である。

すなわち超自然の存在、妖精がやってきて人間と結ばれるが、夫が禁忌背反をしたために去ってゆくという話では、妖精は必ずしも動物である必要はない。

それでも、このころの文芸説話では「ギンガモール」でも「ランヴァル」でも、妖精は白猪か白鹿に導かれてやってくる。妖精自身が猪になって騎士を導くのだとも考えられる。⁽²⁰⁾

もうひとつ、大地母神が蛇であらわされるのはふしぎではない。そのばあい、蛇神には天敵として、インドならガルグダ鳥が想像さ

れる。日本では蛇はムカデが敵で、俵藤太がムカデを退治して蛇に感謝される。そしてより一般的には蛇の敵は猪である。蛇神、それも女神は絶対唯一の存在ではなく、つねに天敵に脅かされる存在なのだ。その点、狼や熊とちがうところで、鳥や猪とセットで登場する神格と考えられる。猪が蛇の「影」であると言ってもいい。ギンガモールの妖精も猪とペアを組む蛇妖精だったかもしれない。

したがって蛇妖精の話に猪が登場することは必ずしもふしぎではないのだが、「ギンガモール」などの文芸話以外に例がないとする、想像力としては神話的に説得的でも、それをあえて物語に登場させ、むしろ蛇妖精以上の主人公としたところにはそれなりの理由がなければならぬ。「メリュジーヌ」譚はその後、ゲエテ、ネルヴァル、フランツ・エレンス、ブルトン、ミッシェル・ダールらがくり返しとりあげるが、猪はどこにもでてこない。

おそらくジャン・ダラスとクードレットの「メリュジーヌ物語」でだけジョフロアという「猪」が登場するのは、(名前だけならワルター・マップのエンノも「大鹵のエンノ」と呼ばれている。)この両者が蛇女、あるいは妖精女房の伝承を利用しながら、それ以上にメリュジーヌの子孫によるリュジニャン家の形成のほうに興味があったからにちがいない。メリュジーヌの子供は両者とも十名の名前をあげている。そのうち上のユリアンとギーはキプロス王の救援に赴いて、軍功によりユリアンはキプロス王に、ギーはアルメニア王になる。ルノーとアントワーヌはリュクサンブール公の救援をはたし

て、ルノーがリュクサンブール家をつぎ、アントワーヌがボヘミア王になる。ここまでは現実に十字軍に参加したリュジニャン家のギーやアモリーらの武勲を思わせる。ギー・ド・リュジニャンはエルサレム王のやもめ、悍婦のシビルと一緒にあって、エルサレムの王位につく。

ところで、ジャン・ダラスが「メリュジーヌ物語」を書いたのは、ペリー侯ジャンの命によるものだった。ペリー侯がポワチエの地を英仏戦争のどさくさにまぎれて領有していたのだ。本来はリュジニャン家のものであったが、リュジニャンの正統はキプロスのほうへ移り、ポワチエのあたりではリュジニャン家の勢力は衰微していた(一三〇八年に断絶と言う。ル・ゴフ)。英仏戦争で、イギリスがそのあたりを占領すると、それを奪回する力はリュジニャン家にはなかった。それをはたしたのはペリー侯だが、戦いはイギリスとフランスのもので、いかに王子であっても自分で攻めとったからといって領地を自由にはできなかった。フランス軍の将兵が勝ちとった領地はフランス王がそれぞれの勲功や継承権にもとづいて、しかるべき家臣に分配するのだった。そこで、しかしペリー侯は、自分こそリュジニャン家の正当な継承者であり(彼はリュクサンブール家に母方であつてつながつていた。リュクサンブール家はリュジニャン家と縁結びをしていた)。かつ、その地は彼がつながっているリュジニャン家のものであることを主張して、他のものの口を封じようとした。

「メリュジーヌ物語」は前半はポワチエ伯の騎士レモンダンが、

いかにして妖精メリュジーヌと出会って、ふしぎな方法で領地を得たか、そしてその後、主として妖精の力で、ヴーヴァン、メルヴァン等の砦を建て、領地を拡大したかを示している。

後半は、メリュジーヌの子供たちの上の四人がいかにしてキプロス、アルメニア、マルシュ、ボヘミヤの王位についたかを語り、ついで、本家のリュジニヤンの地がいかにしてジョフロアにゆだねられたかを語る。ジョフロアは六番目の息子だが、八番目オリーブは、母親みずから断罪しなければならぬ荒れくれものであり、結局、母親の出発後、地下室でいぶし殺される。七番目は修道士をころごして、修道院もろともジョフロアによって焼き殺される。五番目はルノーで、一つ目の怪物だが、ギーのあとでアルメニア王になる。残りのチエリーとレモンは母親の失踪のときにはまだ小さかったが、やがてフォレスとバルトネの領主になる。ただし、歴史によると、この系列はあまりぱっとしなかったようだ。

一番はなやかだったのは、もちろんギーのあとのキプロス王だが、その系統はフランス本国には戻らない。問題はリュジニヤンを中心としたポワチエ領で、レモンダンはそのジョフロアにゆだねる。ところでジョフロアには子供がいない。そこからリュジニヤン領の領有権の問題が生じてくる。リユクサンブル侯でもあるペリー侯がリュジニヤン家とのつながりから権利を主張する。そしてそのための年代記が「メリュジーヌ物語」である。ひとりもののジョフロアが主人公になるべき必然性があるのである。そしてそのジョフロ

アがポワチエに権利を有しながら継承者を残さないためにはヤマトタケルのような猪突猛進型の勇士性を持つて²¹⁾いる必要がある。女など目もくれない直情径行性だ。

「メリュジーヌ物語」は、妖精と失意の騎士の結びつきによって生まれたジョフロアが苦勞をしながらリュジニヤン正統領を守りぬき、戦場で手がらを立てるところを描いている。

一方、メリュジーヌは、ふしぎな方法で領地をえさせ、城をいくつも築きはしたが、それよりも十人の子供を作ったことのほうが物語の中で功績は大きく、レモンダンとの出会いと婚礼の宴の場あとは、レモンダンによる覗きの場と、ジョフロアの悪行のしらせがきっかけとなってレモンダンが秘密をあかしてメリュジーヌが去ってゆく場にしか登場しない。それ以外は、まずはユリアンからルノーまでの長子たちの活躍と、ついでジョフロアの物語で占められていて、分量的にも、「メリュジーヌ物語」はジョフロアの物語と言つていい。「リュジニヤン家の高貴なる物語」が正式の題名と目される²²⁾。

ジョフロアは、生まれたときから、猪の牙を生やしていた鬼子で、まずはじめの武勲は、ユリアンたちとちがって領土獲得ではなく（「わしは領地のためでも、宝のためでもなく（……）キリストの教えのために出かけてゆく……」²³⁾）かつ、ほかの兄弟がペアで出かけるのに対して、たった一人で、²⁴⁾乱暴ものの巨人たちとの戦いに出かける。ほかの兄弟が、危難に瀕した諸侯を救って王女を報賞として与

えられるのに対し、彼が戦った巨人は、はじめから彼と同じ一人もので、その宝ものに女気はない。

最初の巨人はゲランドの地を荒らす巨人ゲドンである。その巨人を討ちとった直後に、弟のフロモンが修道院に入ったことを知って、怒り狂って修道院に駆けつけて、修道士もろとも焼き討ちにする。

ついで休む間もなくノーザンバーランドに向かい、巨人グリモーと戦う。巨人はかなわないと見ると地の裂け目から地下へもぐりこむ。「どこへ行っちゃまったのだろう？あの大男が、たしかにここにいたが(……) そうだ、この穴からもぐっていったのだ」小さな穴から地中へもぐりこんでゆくのはまさに蛇である。それを穴を掘り広げ追いかけるのは猪だ。最後はみごとな突撃で相手の息の根をとめる。

この勲の結果、彼は何を得たのだろうか？ 何もない。この巨人グリモーはジョフロアの祖父エリナス王の墓を守る巨人だった。その墓に一族のものが、番人を打ち破って侵入したとき、エリナスにふりかかっていた呪いは解けた。メリュジーヌが母プレシーヌから、エリナス王とプレシーヌの物語を聞いて、エリナス王を罰するため、ノーザンバーランドの山の中に閉じこめたのだ。妖精プレシーヌとの約束を破って、プレシーヌの出産の場を覗いたために、二人ははなればなれにならなければならなかった。それを怒ったメリュジーヌが出すぎたまねをしたのだが、その間の事情はクードレットの韻文『メリュジーヌ物語』では、ジョフロアが墓にふみ入ったと

きに、そこにある石板の記事から読者は知らされる。ジョフロアの得たものはまさに、その一族の起源をめぐる秘密だけだった。

エリナス王も、それが生前であれば山中の幽閉から解放されたかもしれないが、死後では意味がなかった。

むしろ、そのプレシーヌとエリナスが横たわる墓廟の秘密を覗き見たことは(プレシーヌは妖精で不死だから、正確に言えば、横たわってはいないが、その彫像がエリナス王の棺とその上の臥像に寄りそっている)両親の寝室を覗き見る「原光景」体験に相当するかもしれない。その結果は「原光景」なら去勢処罰である。ジョフロアのばあいはどうだったのだろう。このあとフォレスへ戻って、メリュジーヌを覗くようにレモンダンにそそのかした叔父のフォレス伯を殺すが、彼の武勲はそこでおしまいになり、ほどなくして、もう一度、巨人退治に出かける旅の途中で病いに倒れる。巨人、悪人退治にあけてくれて、富にも領地にも、そしてとりわけ愛にも恵まれなかった彼の生涯はヤマトタケルのそれにも似て、愛からも栄誉からも疎外された「孤独者」の哀切な生涯である。

ジョフロアのモデルは、まさにリュジニヤン家の勇士ジョフロア一世と言われるが、ギーやアモリーとはちがって、実在のジョフロアも勇猛な騎士と言うだけで土地も王位も持たない放れものだった。そのジョフロアに大きな位置を与えて「メリュジーヌ物語」を構成したのは、ポワチエ地方に実際に勢力をふるう人物ではなく、流星のように通りすぎた現実の利権とかかわりのない人物として、ベ

リー侯の野心にふさわしかったからにちがいない。

それにしても、物語の上では、蛇のメリュジーヌと猪のジョフロアがみごとな対立をなしている。動物のイメージでは、修道士になったフロモンが地面にもぐるモグラとして描かれている。²⁶ リュクサンブル侯の位をつぐアントワーヌはほおからライオンの足が出ている。リュクサンブル家の紋章はもちろんライオンである。ペリー公がそのリュクサンブル家につながるだけに、とくにアントワーヌに百獣の王の性格が付与されたのだろう。

その他の子供にも、一般に「動物性が付与されている」と言われるが、実際にはユリアンは赤目と緑目、それに大耳、ウードは赤顔、ギーは目っかち(目のついている位置がちがう)ルノーは一つ目、オリーブルは三つ目という具合で、いずれも目のつき方がおかしいだけだから、それをもって動物性と言うのは気が引ける。

猪は本来神だった。人にまっすぐにつき進んできて、その鋭利な牙で太腿や下腹をえぐれば人はたまらず死んでしまった。狼も恐ろしかったが、それは夜の闇の中を音をたてずに忍びよる脅威で、目に見える死の恐怖としては猪のほうがあざやかだった。ギリシャ神話でもアドニスを殺した猪(アポロンないしアレスの化身とも言)は、神の命を受けてまっしぐらに犠牲者に向かって突進してくる死で、それを逃げる方法はないようにも思われる。

それに狼に襲われるばあいとちがって、猪の牙の一撃は瞬間的で、急所を一撃されればたちどころに死んでしまった。腹部を裂かれ

ば内蔵がいちどきにとびだしてしまう。足をすくわれれば宙に舞って、落ちるところを牙で受けとめられればまず助からない。牙が太腿に刺されれば、命は助かっても下半身付随になると言う。その牙がまたとがっているだけではなく、刃がついているようによく切れる。そして猪は、そうやって突き殺したえものをほったらかしてどこかへ行ってしまふ。いじきたなく肉にかじりついているといったことはない。熊は爪が鋭く、ずたずたに肌を切られるという。狼は歯が鋭く、手足を噛みちぎられることも珍しくない。しかし、猪は牙の威力に突進のスピードが加わっている。一〇〇キロ近い猪に体当たりされたらそれだけでも大変なものだ。猪の出る里でなければわからないことだが、猪の脅威は狼や熊のそれに勝るとも劣らなかつた。²⁷

遊牧民にとっては狼が敵である。羊を狼が狙うからだ。定着農耕民にとっては猪や鹿といった草食獣の被害が大きい。とくに日本の農家では猪が害敵だった。早川孝太郎の『猪・鹿・狸』につきぎのように書かれている。

「猪に荒らされた後の稲は、まことに情容赦もないことだった。わけても子持猪にでも出られたが最後、目も当てられぬ狼藉であった。喰う以上に泥の中へ踏みにじって、たまたまた免れたものは、稲扱きにでもかけたように、粒が悉く糞ってあった。猪は穂の幾つかを、一口にて啜えて引きたぐるらしかった。空穂がひょうひょう風に吹かれているのを見て、思わず涙を零したとは、現にたびたび

聴かされたことである」(全集、IV、三十二頁)。

須藤功『山の標的』によれば、「人間と競合する」猪の好物として

「穀類—稲・麦・稗・粟・蕎麦・玉蜀葱

野菜類—白菜・西瓜・山葵・砂糖黍・茶・柚芹

根菜類—甘藷・馬鈴薯・里芋・山芋・筍・蒟蒻・百合根・葛根・

蕨根

果実類—柿・栗・桃・梨・葡萄・蜜柑・パイナップル

豆類—大豆・小豆・落花生

木の實—椎・栃・榎・樫

動物—沢蟹 兎(一三三頁)

とある。つまり人間の栽培するものすべてである。ワサビ、シイタケにまで及ぶ。ただし「どこでも食わないのは大根である」とある。⁽²⁷⁾

それ以外で「人間との競合の多いもの」として

「蛇、マムシ、ガマ、ネズミ、ミミズ、アリ

ブナ、クヌギ、フジ、ナラ」

とある。「ヘビ、マムシ」については微妙で、マムシはともかく、蛇はばあいによると畑や作物を食害するネズミを退治する益獣として大切にされている。その蛇の天敵となると、人間にとっても猪は敵ということになりかねない。

そのあたりは、家畜肉の肉食が定着しなかった日本の特性だろうか？ 西欧では、猪はその肉の美味のためにただちに食用に家畜化

され、猪のままでもさかんに狩りたてられて畑に被害を与えるに至らなかつたのだろうか。あるいはそれは須藤の言うような「焼畑の村」特有のなやみだつたろうか？

遠藤ケイ『山に暮らす』一九九三によると、「一晩で三十キロものサツマイモ、陸稲、豆類を喰いつくしてしまう。とくにサツマイモが好物」とある(一〇七頁)。そして「イモ類が実を肥らせる前には、山地の稲田が荒らされる」。どうやら日本の農業の主作物をとくに好む動物であるようだ。ほかにはタケノコ、自然薯も好むから、まさに日本人と食性を共通していると言ってもいい。ヨーロッパ人にはタケノコも自然薯も食べられるものとは認識されていない。

一方でヨーロッパでは猪—豚の肉は主要な蛋白源であったから、食物を奪いあう間柄よりは、食うものと食われるものの関係だった。古代でこそ畑を荒らす猪のイメージはあるが、近代ヨーロッパでは、畑で猪の被害が報告される例は少ない。森林がまだ残っていて、猪が畑に出てくるのが少ないからかもしれない。

たとえばブドウ畑で猪を恐れる必要はなかつた。麦も、あまり猪の好むものではなかつたのだろうか、それともヨーロッパの森の中には猪の好物の堅果が豊富にあつて、里に出てくる必要がなかつたのだろうか？ それともサツマイモ、トウモロコシ、水稻を好むという日本の猪は日本の風土に順応した特異種なのだろうか？

それでもメレアグロスの猪は、自分にだけ供物のなかつたことを怒つたアルテミスが送つた獣で、体軀は牛のようだったが、とくに

畑を荒らしまわって、農民たちに恐慌をふりまいた。神々が送った怪物の中でも、この猪の恐ろしさはより具体的だった。他のばあいは人身御供などをして神の怒りをなだめようとするが、このばあいはメレアグロスを中心とした猪討伐隊が組織される。しかし、一の矢が女丈夫アタランタによって放たれ、それをメレアグロスがたたえたので大騒ぎのもととなって、メレアグロスもその一族も皆死んでしまう。一家全滅をもたらした呪いの獣である。

このあたりでは猪はすべて牡として認識されていて、のちのような淫乱な雌豚としてのあらわれ方はしない。しかし、豚が家畜化された猪として存在していたのは、神話以前からで、キルケの魔法で変身をさせられたのは豚である。しかしこれも、雌豚になったわけではない。雌豚の淫らさが意識されるようになるのはもう少ししてからである。

猪をめぐる人獣交渉譚は多くはないが、和泉式部伝説中、佐賀の話に、寺に来て仏に供えた茶を飲んでいた猪が赤子を生み、それが和泉式部になったという話がある(「豊国筑紫路の伝説」)。育てたのは子を授かるように祈願していた夫婦で、生んだのは鹿とも言う。和泉式部の足が鹿・猪のように二つに分かれていたという伝承があり、寺の僧が猪や鹿に生ませた子供とも、神の申し子を鹿・猪が乳をやって育てていたからとも言う(「日本伝説大系」十三巻、九八、一〇〇)。和泉式部に足袋がはじまるという伝承の説明とも見られる。

豚のばあいは「豚女房」「美女化け豚」が沖繩にある。豚文化圏の産物とも考えられる。「日本昔話通鑑」の「沖繩編89」では「豚化け美女」として十三の類話が紹介されている。見知らぬ美女が男女の野遊びに加わる。ゾウリを片方隠してあとで見ると豚の蹄になっている。豚小屋をしらべると百歳豚が爪をはがしている。

中国の話で「豚の段違い」というものがある。ある晩、ついぞ見かけたことのない美女が訪れてきて話しこんでゆく。夢中になって男は女を床に誘う。翌朝、鶏が鳴くと女はあわてて帰ろうとする。男は女の靴を片方とりあげてしまう。目をさますと床から血が滴っている。血のあとをたどると下の家の豚小屋につづいている。そこに片足から血を流した豚がいる。(「中国奇談集」鈴木丁三訳編、現代教養文庫、一九七二)。

豚が池の水を浴びて美女になるという話もある。女が臭いので正体がわかった話もある。

同じ沖繩の「豚女房」だと豚は女に化けて毎晩主人の寢床に忍んでくる。あとをつけると豚である。翌日も見はついていると水を浴びて女になって、他の家へ行く。その家の男にグシカの杭をとがらせて、それで突き殺させる。女はその男の種を宿していた。⁽³⁰⁾

淫乱のイメージである。と同時に性をけがらわしいものとする発想からの不潔な動物との連関である。性的動物の例としては猿、ロバ、そして熊、あるいは蛇が出る。(グベルナチス)。しかし、猿とロバはそれぞれ種類を異にしていながらいずれも雄の性行動や、性

器からの連想である。ロバ―馬の雄の性器がとりわけ目立つこと、猿が往々にして卑猥なしぐさをするなどから「性的動物」とされているだけで、とくに「性的」であるわけではない。熊が女好きだというのは神話で戯画化されたイメージの展開だろう。

蛇のばあいは、その姿が男根を思わせ(吉野裕子『蛇』他)、鎌首をもちあげたところ、蛇使いの笛にあわせて立ちあがってくるところに勃起力が想像され、その濃密な交合が、一般に淡白な他の動物たちの交合に比して、とりわけ性的とされるのだろうし、また、湿めた土の中や、暗い石垣の中などに潜む習性や、その表皮のぬめりなどから、闇―湿気―粘性といった「性」の特性が想像されるところもあるだろう。

それらに比して、豚を性的であるときには、特に雌豚が想像されるようで、フランス語でも「雌豚(La Truie)」は「雌犬」と並んで淫婦をあらわす。

ベルギーの作家トマス・オーウエンの「雌豚」は、霧の深い夜、郊外の酒場に立ち寄って、たわむれの賭に勝って、酒場の女と寝る権利を獲得し、豊満な女と一夜を過ごして、翌朝見ると、むちむちと肥った雌豚だったという話だが、人間性を欠いた性愛の対象が雌豚に比されることは沖縄でもベルギーでも同じらしい。

沖縄の「美女化け豚」でも、女に化けた豚が一夜の欲に対して金を求める例が『通鑑』の例話と、類話の十三にある。「淫売婦」を「雌豚」と言う言い方があるかとも思われる。

それに対して猪は、やはり「猪武者」といった猛々しいイメージで、雄、牙、突進といったものを連想させる。「淫乱な猪」というイメージではない。³²猪と豚に共通するのは、貧食ときたなさだろう。猪は泥の中ころげ回るのを好む。(ヌタウチと言う)。豚は野菜屑などのほかに人間の排泄物を食べる。犬にも同じ傾向があるが、豚のほうがより顕著であり、豚が家畜化されたのには、食肉確保のほかにゴミ掃除の期待もあった。(加茂儀一『家畜文化史』一九七三、七三三頁)。イスラエルの民が豚食をタブーとしているのも「ケガレ」からである。(イスラム教ではむしろ転生思想から、豚になった祖先を食べる恐れがあるとも言う)。

「ケガレ」の中には悪霊によるケガレもあり、「マタイ伝8―28」「マルコ伝5―1」「ルカ伝8―26」にあるゲラサ(またはガダラ)の悪霊つきをイエスが豚にのりうつらせてなおした話が名高い。「イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた霊にとりつかれた人が墓場からやってきた(……)汚れた霊どもはイエスに「豚の中に送り込み、乗り移らせてくれ」と願った。イエスがお許しになったので、汚れた霊どもは出て、豚の中に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖になだれこみ、湖の中で次々におぼれ死んだ」³³

カデイツクが収集したバス・ブルターニュの「騎士バヤール」はAT400番の類話だが、王女が九匹の仔猪をつれた牝猪である。³⁴王子が猪を撃とうとすると、猪が自分と結婚してくれと言う。ところが覗いてみると猪は美しい王女で、金髪を梳ると金貨がこぼれる。

その覗き見の結果、王女はいなくなつて、王子が王女をさがしに行くと話は400番の典型どおりである。この系統で多いのは鹿で、この猪が鹿であつていけない理由はなさそうである。

オーノワ夫人の「新編昔話集 (La Suite des Fées à la Mode)」に収められた「猪王子」は「蛇の王子」の類話である。子のない王妃が森でいちごを摘んで食べると睡気におそわれ、夢の中で三人の妖精のおつげを聞く。やがて猪が生まれる。子が授かるようにと願つて授けられた神の申し子で、日本ならタニシか蛇である。³⁵

この猪が大きくなると嫁をほしいと言いだす。最初の女は婚禮の日に恋人と心中をしてしまう。つぎにはその妹と結婚する。新妻は夫を紐でくびり殺そうとする。そのために逆に猪王子に殺される。王子はすっかり世をはかなんで森にひきこもつて野生生活をはじめ。そこへ三番目の娘がやってくる。猪は娘を説得し、洞穴の中で共同生活をはじめ。

実はその前に妖精に会つて、解放の条件をつけられている。末娘と結婚すれば、夜だけ獣の皮が脱げて人間になれる。でも朝はその皮を身につけねばならない。その秘密を妻にあかさなければ、いずれ、すっかり人間に戻る。妻はある晩、王子の秘密に気づき、猪の皮を隠してしまう。王子は、人間になれるチャンスを失うのではないかと恐れるがそのとき、洞穴は光り輝き、すべての呪いが解かれる。³⁶

425番「美女と野獣」が、呪いによって野獣になった王子の愛

による解放を語るのに対し、439番「蛇の王子」は、野獣として生まれた王子が、二回の結婚の失敗の後に、心優しい妻にめぐりあう話で、そのあとに、もう一度禁忌背反による別離と試練があることがあるが、そこは400番や425番と同じタイプの話で、出生の呪いにより、花嫁を食い殺さねばならない怪物が、愛によって救われる話としては「美女と野獣」以上に、嫌悪感のみならず、攻撃性も持った獣を主人公にする必要がある。「美女と野獣」でも猪や豚のケースはあるのだが(リュゼル『パス・ブルターニュ民話集』一般に熊とか蛙などが多く、攻撃性より、滑稽さ、あるいは不適合性が強調されることが多い)。

433番では怪物王子が二回花嫁を殺すモチーフが出るから、蛙やタニシでは、殺害能力に欠けるところがある。「女殺し」あるいは「青髭」に通じるモチーフで、ヨーロッパでは「蛇」、ついで、猪―豚が多い。犬あるいは狼犬、「狼犬」などというばあいも「狼」の言いかえであるとする、「豚」というのも「猪」を昔話風に言いかえたものとも考えられる。マシニョンの収集したコルシカの「赤豚」(ドラルユ番号425―107)二話中のひとつでは豚が最初の花嫁を殺すモチーフが残存している。ジョイステンの「豚の王」³⁷だと豚の頭をした王子が二回まで花嫁の腹をナイフで切り裂く。猪が牙で敵の腹を切り裂くことの言い替である。あるいは性行為の言いかえとも見られる。猪のように突進するだけの性が、女の心身に傷を負わせるだけで、真の相合には至らないことの隠喩とも言える。

マシニョンの「赤豚」はわざと沼水の中にくろげ回って、妻の乱暴な態度を引きだす。

それが妻の死につながる。攻撃性より「汚なさ」をあらわしたものと思われる。

リュゼルの「雌猪」(『バス・ブルターニ民話集』)は、男女の性が逆で、カティックのばあいを思わせる。まず森で三匹の猪を見つけて撃とうとすると、撃つより結婚してくれと言う。結婚すると猪は九人のみごとな王子・王女を生む。そしてそれによって贖いが終わったと言って、美しい女になる。醜さの象徴として猪が用いられている。

このあたりの話はそのままでは日本や東南アジアではないが、425番、美女と野獣や、400番白鳥処女がいないわけではない。猪のイメージではないだけで、異類婚の分布はむしろ濃厚である。たとえば日本では後述のように猿掣が「猪掣」のヴァリエーションとして語られる。これを425番に入れるか否かが問題だが、日本風の425話であると言って言えないわけではない。猪の話はしかし東南アジアでは別の話型で語られる。

ハルマヘラのガレラの話。松本信広『日本神話の研究』による。畑で番をしていた男が猪に傷を負わせる。逃げた猪のあとをつける。と、岩の割れ目から地下の町に下りる。一軒の家に自分の槍が立ってかけてある。入ってみると女がうめいている。家のたるきから猪の皮が下がっている。この皮を着て畑を荒らしに来るのだ。男は女の

傷を直し結婚する。しかししばらくして地上に帰りたくなり、猪の皮をかぶって地上に赴く。地上に戻ると人間の姿になっていたが、二度と妻のもとへは帰れない。

スマトラのバタク族の話。同。男が猪に槍を投げ、あとを追う。(叔父に槍を借り、叔父がその槍の返還を求める。松本信広はもちろんこれを「失われた釣針」のタイプの話と見て、トヨタマヒメ説話との関連をさぐる)。地下の国の王女が怪我をしているのを、槍の穂先を抜いて直す。王女と結婚するが、一夜、逃走し、必死に逃げ。松本はコスカンにより、コスカンはプレイテによる。

動物は猪である必然性はないかもしれないが、畑を荒らす動物としては猪がまさきに思いうかぶ。これがスラヴ圏で「火の鳥」になり、ヨーロッパで300番の「怪物」になるのは、物語の神話化の方向を示している。

ミナハサのトウンブルーの話では、動物は豚だが、水中の国で、豚には釣針がささっている。これがより海洋型になって、魚になってしまふと害獣のイメージはなくなるが、松本はワニの場合をあげている。

ワニ、もちろんトヨタマヒメである。この竜宮の乙姫、あるいは蛇女がときには豚または猪でもありうるということは意外に思われるかもしれない。人を食い殺し、人を確実に死の国へ連れてゆく動物としては狼とワニがあいならんで登場する。猪ではいくぶん、その危険性が薄いようにも思われる。が、畑や漁場の害獣としてはま

た話がちがってくる。海ならサメやトドである。畑なら猪だ。ジョフロアの乱暴ぶりはスサノオを思わせる。スサノオも蛇退治の英雄だから、神話的に言えば猪の可能性が高い。畑での乱暴ぶりは猪である。日本では猪は山の動物というより畑の害獣としての性格のほうが強い。「猪鬃」の話でも、害獣としての猿のかわりであり、後半は「カチカチ山」に接続する。つまり、嫁がカチカチ山風の策略で猪を厄介払いする。猪の背に乗って嫁入りする途中で、カヤに火をつける。「カチカチ山」は熊や狸でも語られるが、農民が知恵をしばって退治する対象は猪である。

さらにその猪が全身火の玉になって、山の頂上からかけ下りてくるオオナムチの話は、猪以外では語りえないだろう。⁽³⁹⁾ そうではなくとも「カチカチ山」でも、なぜ狸なのかははっきりしない。狸が害獣として農民に恐れられていたという形跡はない。⁽⁴⁰⁾ 熊にしても、カチカチ山の風土の村里近くに下りてくることはないだろう。火をつけて追い払うべき存在は猪である。猪はまず剛毛を焼くために、丸焼にする。また猪の赤毛は焼け焦げを思わせる。農民文化を代表するトリックスターの兎が狡知をもってこらしめるべきものは畑荒らしの猪である。⁽⁴¹⁾

猪ははじめ山の神だった。⁽⁴²⁾ 混沌と闇を切り開く原初の国土開発神だった。インドの主神ヴィシュヌの化身でもあり、太陽を突き殺すもの、その太陽をくわえて東の空に向かって突進するもの、東のはてで太陽を空へ向かって押し出すもの、そして、その赤い剛毛は、

立ちのぼる朝日の光ともみなされた。太陽を呑みこむものとしての狼とも地域的偏差によって交替する。グベルナチスによれば狼と猪は交替可能なのだ。共に悪魔の獣である。⁽⁴³⁾

しかし交代可能であることが同一性を示すわけではない。農耕民族は田畑の害獣や、穀物食のねずみをなんとか駆除しようとした。それに対してもっとも効果のあったのが蛇である。そこから、家霊、穀物の守り神としての蛇のイメージが出てくる。ところでその蛇がふえすぎるとこれも困った問題だし、ハブ、マムシなどの毒蛇はほっておくわけにはいかなかった。鷲や鷹も蛇取りの役目は果たすだろうが、飼育動物として蛇除けの機能をもたせられるものは猪だった。沖繩などではハブ退治に猪が活躍する。ところがその猪もふえすぎれば畑を荒らす害獣となる。その猪を封じるには日本では三筆の「オイヌ様」つまり、狼の絵札をもらってきて畑に立てた。猪を駆除するものは狼である。かくて、蛇―猪―狼という三種の動物のサイクルができあがる。昔話ではナメクジ―蛇―蛙などという循環を想定する。「大語園」にある「黄金の猪」では狩人が弁当を食べてひと休みしていると、鳥が弁当箱にとまる。そこに蛇が来て鳥を呑みこむ。それを黄金の猪が食い殺す。それを見て鉄砲を捨てる。

また猪を始祖とする建国神話も少なくない。三品彰英の「神話と文化境域」によればブリヤート族、キルギス族、契丹族に猪祖伝説がある。またスペインを引いて「古代ブリトンの豕神」ありと言う

(一九八頁)。

もとよりギリシャ、ローマではマルスが猪である。北欧ではフレイヤの獣でもある。インドではヴィシュヌの化身のひとつである。

オロチ退治のスサノオ、天の畑を荒らした畑荒らしのスサノオは猪の性格を濃厚に持っている。のちの文化英雄、オオナムチ、オウスノミコトはいずれも猪との対決に命を落としている。⁽⁴⁴⁾最後に雄略が、「書紀」では猪を蹴殺す（「記」では恐れて木の上へのぼる）。

スサノオは根の国の王である。東南アジアの豚食文化圏では、畑荒らしの怪物を追ってゆくと地底の猪の国に着く。日本の竜宮である。その竜ないし猪の娘と結婚して、文化王朝がはじまる。

その神話の痕跡が、猪王子や猪王女との婚姻の昔ばなしになり、日本の「豚女房」にまでなる。⁽⁴⁵⁾

猪の破壊的暴力を巧みに利用して国土開発を行ったのちは、いかにその霊獣を家畜化し、切り刻み、塩漬けや蒸し煮にして加工するかに人間の文化は専念する。婚姻譚はおそらくその家畜化のプロセスの寓話であろう。

かくて神は、根の国に追われただけではなく、食われてしまうのである。

「蛇食い」の猪をそうやって料理して食べてしまったとき、人間の文化は、猪の破壊的暴力も、蛇の陰湿な支配力もたくみに制御することができるようになったのだ。

蛇の母とともに国土造営、野生人討伐を行った猪のジヨフロアは、野獣時代、あるいは狩猟時代の終焉とともに姿を消し、メリュジー

ヌの子供たちの動物性、異相も、第九子、第十子のチエリー、レモンにおいては消滅する。

日本とヨーロッパでは猪のイメージにはさしたるちがいはない。

これは食物のタブーを考えると奇妙なことである。イスラムやイスラエルほどではなくとも、日本にもある時期は豚を含めた肉食の禁忌があった。そしてその結果として猪の家畜化は日本では近代まで進行しなかった。しかし東南アジアや中国は顕著な豚肉文化圏である。また日本でも猪の肉は食用に供せられてきた。隣接文化は、それを受容する風俗がなくとも影響を与える。それに神話成立の時代的な問題がある。

猪が神になったのは、家畜化されて食肉獣になる以前である。その段階では人間（ないし神）が猪に変わる（アポロン）、豚にかわる（キルケ）話にこと欠かない。憑きものつきが豚になる話もある（聖書）。そして、当然のことながら人獣通婚譚が出る。生まれながらにして猪の頭をもっていた王子と娘の愛、あるいは豚女房。

その過程で、猪とかかわって命を落とした悲劇のヒーロー、ヤマトタケル、蛇女の息子で猪の呪いを負って生まれたジヨフロアに、神話が文化英雄の登場で人文説話化するプロセスが認められる。

問題は昔話がどのあたりで成立するのかということだ。神話と昔話の前後関係は国によって異なる。国際的な昔話の話型が伝わってきてから独自の神話が成立した国もある。神話が民衆化、地方化して昔話になってゆく地方もある。日本の昔話は仏教説話の影響を色

濃く受けている。ところがインドでは大部分の説話は仏教以前に成立している。

あるいは焼畑時代の説話と水田耕作期の説話と分けるものもある。⁽⁴⁶⁾中村禎里は「猪聲」を「猿聲」、「蛇聲」の古態と見る。ヨーロッパでも「メリュジーヌ」や「ギンガモール」の物語は、狩猟文化とのつながりを想定させ、農耕文化にはつながらない。

もうひとつは昔話の地域性である。豚女房は沖縄に限られ、猪聲は中国・四国である。神話のレベルでは日本とヨーロッパは共通の基層文化にたつらなっていることが想定されるが、かなり後代に日本やヨーロッパで成立したとみられる昔話では、文化性、風土性のちがいが色濃く出て、その分布も限られた地方に偏る傾向がある。すると、豚女房、猪聲と猪王子、豚の王の昔話までも同じ地盤でとらえることには問題がある。おそらく豚の話は猪の話から切り離れたほうがいい。南方熊楠の『十二支考』の「猪」の項は、ほとんど豚の話で、猪の話ではない。柳田が熊野に遊んだとき、そのあたりで猪がよくとれることに一驚している。その熊野で南方がほとんど猪の話をしなことも興味をそそる。

日本の狩猟伝承は、柳田の「後狩詞記」の椎葉村でも、早川や松山の伊那谷でも、ほとんど猪狩りをめぐる風俗である。そこでもしかし、山の神に獲物を奉納はしても、猪自身を崇拜することは報告されていないのと、猪をめぐる物語がほとんどなく、猪の神話化されない生の生態がこまかに報告されているだけであることにも驚か

される。

おそらく猪をめぐる日本とヨーロッパのちがいはここにある。日本の猪の出る村では、猪は物語ではなく現実なのだ。⁽⁴⁷⁾きわめて神話的な獣を現実の動物としてしまったこと、それも西欧のような食肉化や家畜化をそれほど先行させずに行ったことに日本の現実主義的な特異な精神構造がある。記紀であればほど荒れ狂った動物をそのまま受け入れたところが日本らしいところだ。ヨーロッパでは猪―豚を人間社会に受け入れるには「動物裁判」⁽⁴⁸⁾が必要だった。

さらに言うなら日本の猪のそこはかとなない俳諧味、滑稽味も西欧にはないところだ。

猪の寝に行く方や明の月 去来⁽⁴⁹⁾

注(欧文参考書は書目、引用文とも和訳して掲げる)。

- (1) 須藤巧『山の標的』にフォークロアの証言が「猪については極めて少ない」(一一七頁)とある。
- (2) ジャン・プリウール『古代の聖獣』一九八八、「猪はとりわけガリア人によって崇拜されていた」(六六頁)。戦いにおいては猪の旗印を先頭にかかげた。
シユヴァリエ・ゲールプラント『象徴事典』「猪は精神的権威を象徴する」。またレイナツハによれば猪はケルトのトードテムムである。
- (3) 後述するように、一般にこの「クサイナギ(野猪)」は狸の類と見られているが、「猪」の文字が用いられていることは無視できない。
- (4) 柳田が「後狩詞書」を書いていろいろ椎葉の狩猟伝承は避けて通れな

(5) いものになってゐるが、この狩は猪である。村の祭礼にさいし、いかに女たちが豚を解体するかが詳しく描かれているが、昔から豚を年に一度、主な祭日にしめて、足の先から臓物までむだなく食べ、残りの肉を塩づけにして一年かかって食べること、フオークロアに頻繁に記されているところである。したがって豚は臓物料理や、加工肉としてのイメージが強く、飲みものとしてはビールが好まれている文化で支配力をふるいつづけている。

ところで、豚と猪はほとんど自動的に同一視されてしまう。しかし、動物学者に言わせれば、猪と豚は、狼と犬くらいにへだたっている。いや、狼と犬くらいにもちがいがあるといふことになる。野良犬に鎖をつければ飼犬というのとはちがうよう、猪を飼いならすうちに家豚が出てきても、そのもとの猪といまの猪が同じであるかどうかはつきりしない。豚にしても、いまの豚と昔の脚の長い瘦せた豚とは同じとは思えない。

(6) ジャン・ダラス『メリュジーヌ物語』一三九三(正しくは『リュジニャン家の高貴な物語』が現存するテキストとしては最初である。ついで一四〇一年にクードレットがパルトネの領主ジャン・ラルシュヴェクの命によって、韻文の「メリュジーヌ」を書く。一四五六年にチューリング・フォン・リンゴルテインゲンがクードレットをもとにしてドイツ語(散文)「メリュジーヌ」を書く。いずれも、メリュジーヌの母プレシーヌとスコットランド王エリナスの愛と、出産の場を覗く禁忌背反による別れの物語と、ついでメリュジーヌとポワチエ伯の騎士レモンダンの愛と、水浴の場の覗きの禁忌背反による別れの物語、メリュジーヌの十人の子供たちの武勲の物語と、メリュジーヌの二人の姉妹、バレスチーヌと、メリオール(の物語)を含む。メリュジーヌは下半身蛇の姿で毎週土曜に水を浴びている。彼女の子供たちのうち、六番目のジョフロアは猪の牙をもって生まれている。

この話はドイツでは『麗しのメルシーナ』として民衆本の形で広く流布する。フランスではジャン・ダラスの物語が広く読まれ、各地

猪の歳時記(篠田)

に、メリュジーヌが移り住んだ地の伝承が残る(グルノーブル近郊サスナージュなど)。

(7) 「猪はハブや蝮を好む」須藤・前出書、一三〇頁

(8) 「愛知の昔話」一九七八

(9) 林道春『本朝神社考』に「世俗以此故謂胆吹神為八岐大蛇所変也」と言う。

(10) 「猪・鹿・狸」『全集』四、九六頁

なお『大語圈』には、蛇と猪の交替する話がいくつか紹介されている。そのひとつ、滝口の道範が術を習う話は『今昔』二十一にある話だ。道士について修業し、川上から流れてくるものを抱きとるよにと言われるが、はじめは大蛇が、ついで猪が流れてくる(この猪は狸ではない)。蛇をのがして猪をとらえた結果、二流の術を学ぶことになる。

「千匹猪」という伝承では、蛙、蛇、猪などが出てきてつきつきに食いあうさまを見て無常を感じる猟師の話、猪と蛇が不可分であることとの例であろう。

(11) ジャン・ダラスはメリュジーヌをよきキリスト教徒として紹介しようとしている。彼女自身に「私は神を信じます」と言わせてもいる。ミサにも出席する。しかし、レモンダンと別れて、竜女となってしまったときに信仰を捨てたとも、教会から破門されたとも書かれてはいない。『梁塵秘沙』に「竜女も仏になるならば、などがわれらもならざらむ」と歌われたような意味での「竜畜」というニュアンスなのか、つまり動物になって、人間世界からも教会からも追放されたと解するのかがどうかは微妙である。蛇となって去っていったが、妖精の国ではふたたび人間の姿をとりもどしているかもしれないのだ。

一方のジョフロアはそれでは猪だから、「よきキリスト者」ではないのかというとこれも疑問で、修道院焼打ちなどをしはするが、結局はローマ教皇の命ずる罪滅しの行を行ったりする。

猪の牙を持って生まれた彼は日本なら「鬼子」として山野に捨てら

れるところだが、ジョフロアはきちんと洗礼も受けて育てられたようだ。「猪だから人間ではない」とは言われなかったのだろう。人狼とはその点異っている。

- (12) ジャン・ダラスはレモンダンに「ああ！いまわしき蛇女よ、神かけて、そなたとそなたのなすことと、すべて幻じゃ。そなたの生んだ子供の一人たりと言えどもまともな生き方はするまい！」と言わせる。それに対してメリュジーヌは悲しみながらも冷静さを失わず、後のことを細々と指示して別れてゆく。別れざわにふたつの魔法の指輪を渡し、これをもっていかざり敵に負けることはないと言うのは、トヨタマヒメのシオミツ珠とシオヒキ珠を思わせる。

クードレットでは、レモンダンのせりふはほぼ同じだが、それを聞いたメリュジーヌの反応はより人間的で、「あなたの裏切りと、いつわりと、よこしまな言葉と、残酷さと、おしゃべりとが私を永遠の苦しみに投げこみます」云々と、レモンダンを責めたためる。

その言葉のあととはどちらでもメリュジーヌは窓から空にとびたつて、見る見る大蛇に変わってゆく。下半身だけではなく全身が蛇である。

- (13) この巨人退治は基本的には文化英雄による大蛇退治である。フランスの巨人の代表はガルガンチュアだが、これは「ガルガン」、「ゴルゴン」と関係があると、ドンタンヴィルは言っている。つまり蛇ないし猪である。一般に巨人―大蛇は地下神話である。蛇身の地下神を文化的な騎馬神が制圧するのが、ゲルマンの文化である。土俗の神は地下の巨人(ないし小人)でありつづける。「フロリモンのロマン」でカルガエウスという巨人は猪であらわされる。

- H・ドントタンヴィル『神話のフランス』一九六六
 (14) F・ブノワ「竜尾騎馬神像」『コレクシオン・ラトムス』一九四九
 (15) 小島環禮編『蛇の宇宙誌』一九九一他
 (16) 「アイルランド地誌」
 (17) 「バユー地方の民話・伝説・俚諺」一八三四

- (18) 「フランシュ・コンテ地方の民間伝承」一八五四

(19) ワルター・マップ「アレックノックの水の精」の話。

(20) 「バルトノプー」、「ペルスヴァル続篇」、「マビノギ」などに猪が出る。

(21) 彼は思ったたらただちに行動する。弟のフロモン、叔父のフォレス伯をいざれも、彼らのよからぬ噂を一言耳にただけで、駆けつけで問答無用で殺してしまう。

(22) クードレット「メリュジーヌ物語」アルフランクネール校訂版九五頁

(23) もっとも、末子でリュジニャン領を相続することになるチエリーとは行をとにもにすることがある。それでも、単独行が彼の特徴である。猪のことをフランス語で「サングリエ」と言うのは「一匹猪」の意である。ウジエーヌ・ロラン『フランス動物誌』他によると年老った猪はまさに「サングリエ(一匹猪)」になるが、若いときは群れをなす(日本猪は若くとも群れをなさないとも言う。小原『続日本の野棲動物』)

(24) 山中に生きながら閉じこめられたのは、ヴィヴィアーヌに呪いかけられた魔法使メルランの運命だが、日本で言えば、三輪山に封じこめられたオオクニヌシノミコトだ。あるいは根の国の王となったスサノオでもありえよう。

(25) L・ストウーフ『メリュジーヌ研究』一九三〇、九四頁

(26) クードレットでは「狼の毛皮」が鼻のわきについていると描かれているが、ここはジャン・ダラスにならって、鼻のわきにモグラのような毛の生えたあざがあったと読んでおこう。

(27) 記紀において、人の命を脅す獣の筆頭は猪である。狼については記述がない(豹狼は別か)。熊は、熊野に化熊が出たが、神武は喪神はしたものの命に別状はなかった。蛇は、八俣大蛇が人を貧り食ったとあるが、現実の脅威であるよりあまりに神話的である。ワニ、サメは、なるほど恐ろしげだが、オオナムチの物語に出てくるイナバのシ

ロウサギは東南アジア起源であることは別にしても、ヒーローであるよりトリックスターで、彼の皮をむいたワニには、ヤマトタケルの命を死に至らしめた猪(伊吹山の山神)や、雄略を木の上に追いあげた葛城山の猪(紀では雄略が猪を蹴殺す)とは比較にならない。

ワニ(サメ)は出雲国風土記では猪麻呂の娘を食い殺したが、猪麻呂が怒ると百余のワニが下手人のワニを囲んで連れてくる。あるいは力自慢の男が水中に鹿を追って、ワニに襲われるが、逆にワニをつかんで岸に投げあげる(『今昔』)。いずれにしても山の猪と海のワニとが双壁であるうが、猪のほう一枚上であったようだ。

記紀ではほかに神后記に、香坂王が猪に食い殺されたとある。これ以上、危険な獣はなかった。

ギリシャではアドニス殺した猪のほかにメレアグロスに退治された猪も、メレアグロスの軍勢を何人も血祭りにあげている。エリュアントスの猪は獍猛をもって知られ、ヘラクレスが第三の功業として退治する。

北欧ではフレイの黄金の乗り代である。またフレイザーによれば猪は穀霊である。このふたつは殺し屋のイメージとは一致しないようにも見えるが、狼も穀霊である。殺戮の力と豊饒が結びつく。

マルセル・ドゥティエンヌが『アドニスの園』で紹介している話でテュデウスがアドラステのもとに戦士として赴いたときに、猪の皮をかぶっていたと言う。彼が討ちとった獣の皮で、武勇の象徴だが、これはゲルマンの戦士が狼の皮をかぶって「戦士の怒り」の発作にかられて戦いに赴くことを思わせる。まさに猪と狼は交替する。しかしギリシャでは狼の毛皮をかぶったドロンは卑怯さの代表とされる。ギリシャの猪はゲルマンの狼に通じ、ギリシャの狼は少しイメージが異なるかもしれない。

中国の『譬喻経』では豊樂王の慢心を罰するために天帝が送った鉄猪の話がある。王は「禍」というものを知りたいと欲して、さがさせる。天帝は鉄猪に禍という名を与えて王のもとへつかわす。毎日、こ

猪の歳時記(篠田)

の猪に針を食わせる。やがて国中の針が尽き、始末に困って火中に投ずると真赤な火の猪になって国中を走り回って焼き滅す。鍛鉄のイメージであろうが、オオナムチの赤猪にも通じる。火と鉄の力もまた豊饒力の象徴である。

『大語園』には、山中の猪王として熊笹を生やした大猪の話がいくつかある。それを射つと獵師がにわかには熱を出して死ぬとか、しばらくして一本足の野武士が湯治に来るが、部屋を覗くと猪だった(大和、峰温泉の伝承)、あるいは爲篠王という名の猪に矢を射って逃げるところを追うと杉の洞の中の千手観音だったなどと言うが、多いのが一本足の妖怪の話で、天目一箇神伝承のひとつ、山中の一本足の鍛冶神伝承を思わせる。

もちろんその他に畑に対する被害も甚大だった。須藤巧のあげた資料に昭和五〇年の調査結果が出ている。日本全国で鹿の被害が六九三一万八千円、猪が一六億七二〇五万六千円とある。

(28) アタランテは生まれてすぐに山に捨てられ、牝熊に育てられた。そしてアルテミスに従って山野で狩をして暮らしていた。猪狩できわだった働きをするわけである。その後、求婚者たちを競走において負かしては殺していたがヒッポメネスと一緒にあったあと、ゼウスの神域を犯して、神罰でライオンになる。

(29) 中村禎里は『日本人の動物観』で、猪と人間の通婚譚はないと言っている。もちろん後述するように「猪聲」は十話以上採集されている。ヨーロッパではあとで見ると400番と425番に猪の例があり、433番に豚聲がある。オノノワ夫人の「マルカッサン王子」も猪である。これは433番であろう。アフアナシェフでは「ロバ皮」が「豚皮」である。

(30) 「与那国島の昔話」岩瀬博他篇、一九八三。
(31) 豚が性的であるのは、ひとつには多産であること、一度に十匹以上(日本ではシシ十六とも言う)生み、生涯に百匹以上産出するということによるだろう。なおビュフォンによれば雌豚はつねに発情してい

て、雄を求めると言う(『全集』一七七五、I、二九五頁)。

- (32) それでも数頭の雄が最大百頭の雌をしたがえることができるという。(J・クラットン・ブロック『動物文化史事典』原書房一九八九、一九九頁。また事実、猪は群れをなして生活する。しかし、人間の前にあらわれるときはたいがい一頭きりである。

藤沢衛彦の『日本伝説研究』第五卷に「牡猪と女」というアミ族の話がのっている。娘が粟畑の番を言いつかるが、猪とつるんでいて、そのあとは畑を猪が荒らすにまかせている。「猪髯」が女に殺されるのに対し、この話では、女の側は殺意はない。それにここでも猪は一頭きりだ。多産とか一夫多妻とか、群棲というイメージには淫らさがあるが、放れ猪には、毅然たるおもむきがある。性的ではあっても淫猥ではない。

それ以上に猪には愛されない男のイメージがある。愛に恵まれない一人もので、愛されないからこそ、命を賭して突進する。愛を斥るアルテミスの獣でもある。女のもとに近づいていっても、相手は恐れて逃げるだろう。猪は怒って突進して、女を突き殺すだろう。鋭利な牙で近づくものを突き殺すことしかできない武骨者、「青髭」のイメージだ。しかし実は、雌豚にも匹敵する淫猥であるという。

- (33) 猪は泳がないと柳田が言ったところ、全国から反証がつきつきに寄せられ、「対州の猪」で、「猪は泳ぐ」と訂正せざるをえなくなったのは有名な話だ。その訂正が出たあとも、もとのテキストを取りあげて、柳田説の誤りを論ずるものがいまだに跡を絶たない。

海を渡る猪を漁師が舟の櫂で止めたといった話はよく報告されている。ひとつの地域で猪の人口密度が一定数を越えれば自然に海を渡って他の島へ行くのだろう。

それに対してゲラサの豚は水に入っておぼれ死んだと言う。狂犬病のような流行病にかかっていたものとも思われ、「汚れた壺」に二重の意味が付与されていたのだろう。

『日本霊異記』に行基が説法をしていると髪に猪の油を塗った女が

来て、行基がそれをとがめた話ののっている。凡夫には油と見えたものが聖人には「穴の血」と見えたのである。これも「汚れ」の二重、三重の意味を含んでいそうである。

- (34) 九匹の仔猪というのは他の話からの混入であろう。リュゼルの話では豚が人間と結婚して九人の子供を生んだときに呪いから解放される。髪を梳くと金貨がこぼれる話ではアルターニュにリュゼルの採集した「巨人カラバルダン」がある。この王女は鹿である。しかしタブーは同じ「見ること」だ。

- (35) 日本の申し子は火抵は溫和しいが、蛇のばあいはクレフィシ山説話では叔父を殺して昇天する。タニシのばあいは嫁をほしがる。

- (36) 皮を燃すばあいには、たいいはいは王子が最初から試練をやりなす。王子が一定期間の試練を無事に終えることという条件が課されているのだ。

- (37) シヤルル・ジョイステン『ドフイネ民話集』

- (38) しかし、話によると猪が牙で畑を耕してくれたというものもある。「日本昔話辞典」。水田だととくにころげ回って荒らすし、畑でもほっくり返すが、作物の植わっていない時期なら、猪が暴れば土の堀りおこしになるかもしれない。

関敬吾の「日本昔話大成」では香川(讃岐)で一話、広島で五話、猿のかわりに猪になった話が猿髯として分類されている。猪髯を厄介払いするのはカチカチ山型で、薬を背負わせ火をつける。一話だけ、嫁入りの途中で猪が水を飲んで、りっぱな男になるという「タニシ息子」型の話がある。「日本昔話通鑑」でも広島で猪髯入りが十数話報告されている。

なお「猿髯」は425番話より、「女房奪還」の話に通じている。そのもとは「白猿伝」であり、西欧の「青髭」である。

- (39) この話は焼畑の話とも解釈できる。猪が焼畑文化の獣であることは異論がない。もうひとつ「鉄猪」の話も思いだされる。

- (40) それに「狸汁」が美味であるという伝承もない。肉として美味なの

は猪である。(あるいは鹿だ)。また狸が人間を食べるといふ話も無い。猪も人間を食べはしないが、豚だと幼児を食べたといふ話はよく伝っている。西欧の「動物裁判」で一番多く裁かれたのが、人食い豚である。(ヴァルチエ『動物裁判』)。しかし狸と猪は日本の説話世界では接続している。

今昔の「クサイナギ」は猪か狸か判然としない。しかし、「カチカチ山」を見ると地域によって猪と狸が交代していることがわかる。二〇―一三話に普賢菩薩に化けた「野猪」の話があるが、これが「宇治拾遺」では狸になっている。ことばの上の交代であっても、いずれにしても猪と狸が交代しているのはたしかである。ここでは家畜としての豚ではない。ただし、近世になると、もはや狸のイメージが定着して交替は不可能になる。

(41) 中村はシカ、イノシシは山の神であったが「水田農耕の神へは発展」できなかった(六九)としている。しかし蛇が田に水を入れる話に登場するからといって、現実に蛇に水管理者の機能があるわけではない。イノシシが焼畑の敵でありながら山の神でもあったと言つたら、水田においても、猪は敵でありつづけたと言えらう。オリエントの牛が水の神とされたことは犁耕を考えれば納得が行く。しかし蛇と水のかかわりはそう濃厚ではない。

(42) 和氣の清麻呂の話は「水鏡」にあるが、三百頭の猪は宇佐八幡の使神だろうか。猪に会って足なえが直つたと言つた。

『大語園』では、足立寺縁起として、清麻呂が道鉄に両足を斬られてうづぼ舟で流されたが、宇佐に流れつき、猪に負われて神殿に至ると五色の蛇が足をなめて、たちどころに足が生えたといふ話を紹介している。

「元享釈書」に高弁が修業をしているときに見た五星の猪に導かれた猪の群れ、叡山の源算が道場を開こうとしたときにあらわれて地ならしをして手伝った数千頭のイノシシなどは山の神としての猪の姿をよくあらわしている。それも日本で豚の家畜化がされなかったから

だろうか。

(43) サヴォアの伝承で、アメテ二世なる人物があるときローンの森で一頭の巨大な猪と格闘して命を落とす。ランジャンの領主は旅人を八つ裂きにしていた猪を仕止めようとして、勢子や従僕を失い、自身も牙で切られる。この猪はサタンの化身であったと言つた。(I・290) ジュラのフルジュネの近くに「妖精岩」と呼ばれる岩があり、そのあたりに猪の大群が出没する。それを黒づくめの騎士が狩りたてる。村人たちはその騎士の馬のためにまぐさを用意しておく。(セビヨ『フランス民俗学』I・318)

スイスのダン・ド・ヴォーリオン山には金が隠されている。しかし、グロベット・ロンと言つた妖精が番をしている。彼はクリスマスが近づくと猪に乗って山々を駆けめぐる。(I・244)

妖精が乗ってかけ回るのは馬が多いが、小型の獣では猪である。狼に乗るのは魔法使いだ。

猪の毛が焦茶色なのは、かまどの中にもぐりこんで焦げたからだと言つた(II・9)

ノール県ではバレイシヨ畑を猪から守るために聖霊をかかげた竿をたてる(III・41)

ガストン・フェビユスの「狩の書」に「猪は泥の中をころけ回る。(……)いつもぶーぶー言つて森の奥深くにこもる。(……)畑を荒らして野菜や作物をほっくり返す。食欲なあまり朝にあつても気がつかない(……)犬の牙は猪には通じない」云々とある。(P25―26)

猪のとり方については、槍によるもの、落とし穴によるもの「等々」とあるが、泥沼でぬたうち回っているときは簡単に矢で仕とめられる(97)。

(44) 猪に殺された記紀の人物では前述の神功皇后の新羅征伐の帰りに叛いた香坂王がいる。事の成否を占つてうけい狩をしたところ怒猪が王子を食い殺した。占いとしては、崇峻紀に、天皇が献上された猪を見て「何れの時にか、此の猪の頸を断るが如く、股が嫌しとおもふ所の

人を断らむ」と言ったことが蘇我の馬子に伝って、馬子の乱を引きおこす。またクリムヒルデが、ジークフリートが猪に突き殺される夢を見た話も名高い。

(45) 韓国の昔話では「猪の報恩」がある。助けた猪が長者の娘との結婚を実現させる。花嫁を怪物にとられると猪がとりかえず、その後、死ぬときに猪の皮を深く埋める。

これらに対しギリシャ神話では、猪は狩りの獲物であるとともに人に死をもたらす動物である。ギリシャでは狼や熊の分布が薄く、猪がもっとも危険な動物だったのかもしれない。アルテミスの怒りは猪であらわされる。

(46) 千葉徳爾は『狩獵伝承後篇』一九七七で、「古代より中世、中世より近世へと耕作境界が山間に延び拡がるにつれて、猪に対する精霊意識は急速に退潮し、単に排除されるべき害獣というだけの価値観が定着」したのではないかと見る。

(47) 千葉は、現今、猪を敬ったり畏怖したりする例がないこと、しかしかつては精霊であったこと、そして今でも山の神がのりうつっているときには神聖であることから、「日本人の動物観のうちで、猪に対するこのような考え方こそ、むしろ珍しい事例と言える」と言っている(四六二頁)。

(48) 「動物裁判」については池上俊一氏の同名の書があるが、これはヴァルチエのやはり同名の書によっている。このヴァルチエの書の正確さには疑問がある。

(49) もうひとつ俳諧味より童話趣味だが鏡花の「化鳥」がある。「愉快いな愉快いな(…)笠を着て、蓑を着て、雨の降るなかをびしょ濡れながら、橋の上を渡って行くのは猪だ。」

補注

ギリシャでも日本でも猪の脅威は、村人に対しても畑に対しても大きなものだった。狼の存在はあまり濃厚ではなく、熊もさして危険ではなく、

虎や獅子はいなかった。ギリシャでも日本でも猪がばあいによつては第一の生命の危険だった。

その形姿・毛色は、鉄や火のイメージに結びつく。譬喩経にある「鉄猪」の話(「禍い」というものを知ろうとした帝王のもとに天帝が「禍い」と名づけた猪を鉄で作って送る。これを養うのに国中の針を集めても足りず、遂方に暮れた王が、これを火中に投ずると、火猪となって国中を走って全土を焼土と化す)はあきららかに、鍛冶、製鉄のイメージである。オオナムチの「赤猪」もその系列であろう。古代、鉄や火が(あるいは雷も)猪でイメージされていたのかと思われる。

それが、しかし、やがて蛇神にとつてかわられる。地母神である蛇を、火雷神である猪が食い殺して金属文化を地上に打ち建てるのがふつうのパターンだとすると、日本では文化が一次発生をせず外来文化の導入という形をとったせいも、妙なアナクロニズムが見うけられる。〈猪〉的なサノオは大母神によって打ち負かされる。蛇神は水田耕作を司る。猪は焼畑文化である。猪―焼畑の文化に蛇―水田の文化が導入され、猪は「山の神」の地位を失う。あとは蛇が圧倒的に支配する。猪を駆逐する狼の出番はない。